



国登録 雲興寺鐘楼

国史跡 瀬戸窯跡(小長曾)

歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見 せと 歴史と文化財を知る見学会 「雲興寺と小長曾陶器窯跡」

主催：瀬戸市・(公財)瀬戸市文化振興財団

日時：令和7年11月15日(土)

見学コース： 午前9時00分

(予定時間) 9時05分

10時30分

11時45分

12時00分

あいさつ・駐車場出発

①小長曾陶器窯跡へ移動、見学 ②雲興寺境内・本堂・鐘楼見学

①雲興寺へ移動 境内・本堂・鐘楼見学 ②小長曾陶器窯跡へ移動、見学

①・②雲興寺駐車場へ移動

終了・解散

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

本地大塚古墳(西本地町2丁目)

宮地古墳群(上之山町2丁目)

広久手30号窯跡
木造十一面観音菩薩立像(下半田川町) 県
木造阿弥陀如来立像(下半田川町) 県

古瀬戸瓶子(寺本町)

陶製狛犬(深川町) 国

瀬戸窯跡【小長曾窯跡】(東白坂町) 国
永享年銘梵鐘
聖徳太子絵伝(塩草町)

定光寺本堂(定光寺町) 国
織田信長制札(窯町)
菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉]
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】(鳳山町) 国
源敬公廟(定光寺町) 国
笠原村・両半田川村国境争論絵図(東松山町)
石造地藏菩薩立像(片草町)

陶質十六羅漢塑像(寺本町)
六角陶碑(藤四郎町)

旧山繁商店(仲切町・深川町) 国登録
瀬戸永泉教会礼拝堂建造(杉塚町) 国登録
陶製梵鐘(深川町)

近代

やきものの生産の変遷	
古墳	5世紀
飛鳥	6世紀
奈良	7世紀
平安	8世紀
鎌倉	9世紀
南北朝	10世紀
室町	11世紀
戦国	12世紀
安土・桃山	13世紀
江戸	14世紀
明治(大正)	15世紀
昭和	16世紀
	17世紀
	18世紀
	19世紀
	20世紀

今回見学する文化財とその関連年表

【雲興寺】

【小長曾窯跡】

1384 天鷹祖祐による
雲興寺開山
1403 七堂伽藍の落成(伝)
1430 「化元真毓譲状」

室町時代の操業

1558 織田信長禁制

1699 徳川光友の命による彦九朗の茶陶生産(小長曾窯跡の再利用)

1683 鐘楼建立

1780 本堂再建

1810 鐘楼再建

2009 鐘楼保存修理

1946 瀬戸初の学術調査

2003 史跡再整備
(覆屋建替え等)

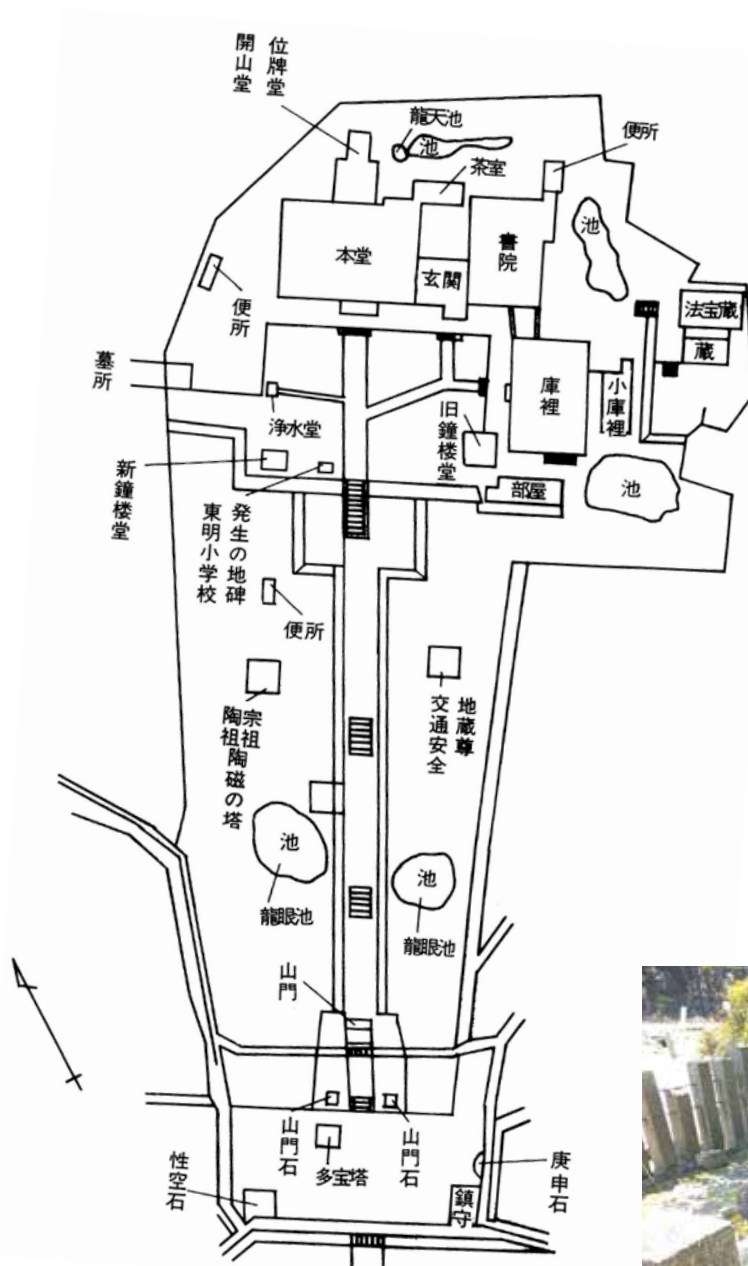
雲興寺（国登録文化財 雲興寺鐘楼）



文化 7(1810) 年に再建された本堂



本堂裏手の龍天池からの湧水が潤す庭園



雲興寺境内の見取図



天先祖命が植えたと言われる天先梅



本堂右手前に建てられている鐘楼



境内山門の前にある性空石

大龍山雲興寺は、尾張の曹洞宗寺院を代表する古刹である。寺伝では、開祖は天鷹祖祐であり、至徳元(1384)年に尾州白坂の毘沙門山に草庵を結んだことにはじまるとされる。天鷹祖祐は、後に足利將軍義満主催の法会で導師を務めることとなり、尾張太守(守護)と知遇を得、尾張での活動を活発化させていく。天鷹の弟子である天先祖命は、応永6(1399)年に天鷹の命を受け、勝光寺と称した寺院を禅寺に改め、雲興寺と改号したという。瀬戸市史では、雲興寺の開創は、天先祖命が永享2(1430)年に美濃守護土岐氏の影響下にある化元真毓から、勝光寺の譲与を受けた時点と考えられている。

本尊は釈迦牟尼如来座像で、右脇仏に普賢菩薩座像、左脇仏に文殊菩薩座像を配している。本尊に銘文はみられず、寺伝では寛弘6(1007)年に恵心僧都によるとされるが、鎌倉時代の様式を伝えるものともいわれる。

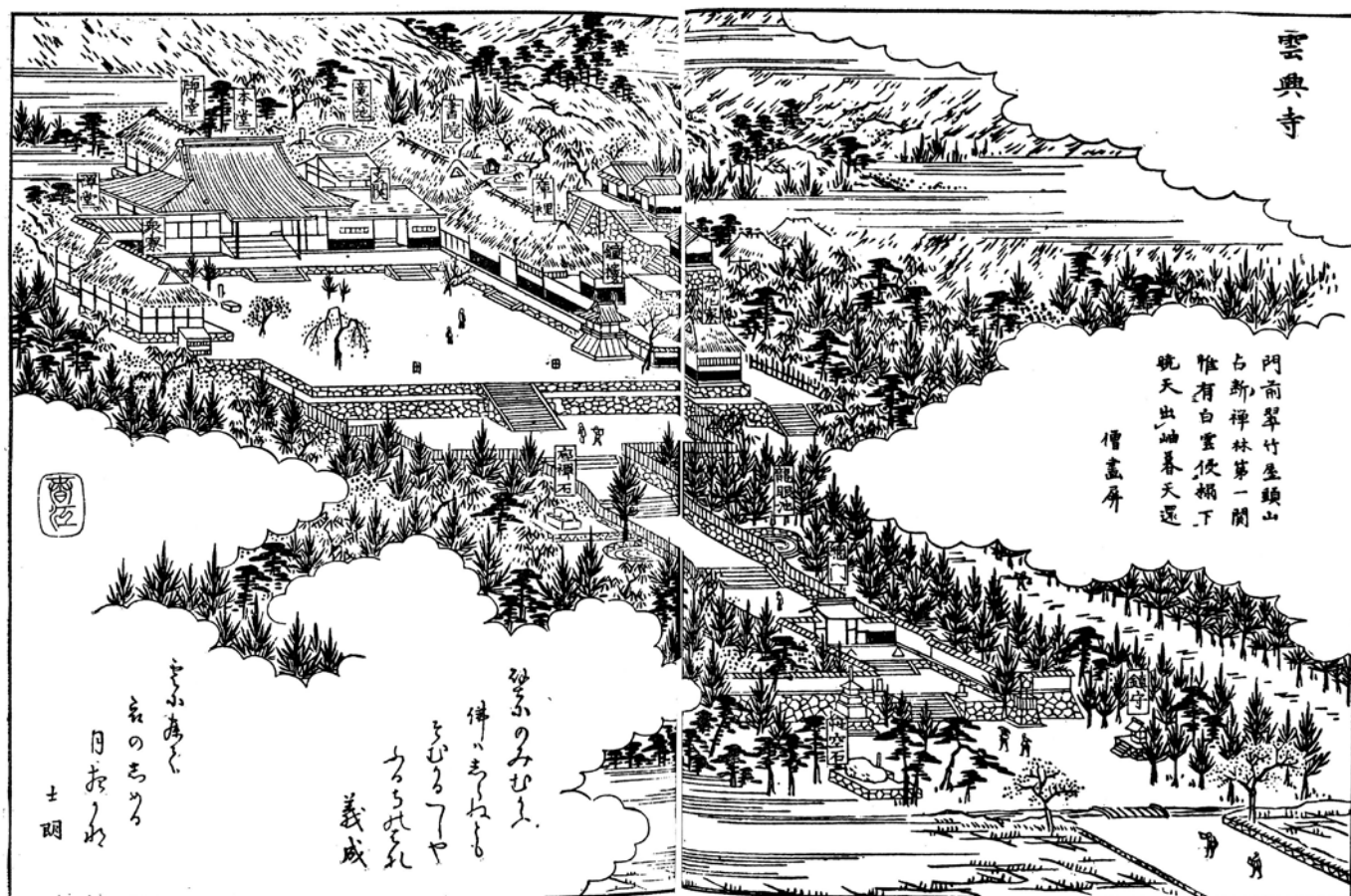
本堂・庫裡は、天文明和4(1767)年の大洪水のため大被害を受け、安永9(1780)年に現在の本堂が再建された。本堂は、桁行実長11間、梁間実長7間半の規模で、

入母屋造の赤津瓦による棧瓦葺建物。

山門は、寛保3(1743)年に建立。その右手前に「不許山門禁葷酒」、左手前に「三界万霊等 層雲代」の山門石が建っており、明和4(1767)年の大洪水の際に破壊され、明和6年に建立されたと記される。左の山門石前には、宝暦10(1760)年に建てられた多宝塔がある。



雲興寺本尊 釈迦牟尼如来坐像と
左右の文殊菩薩・普賢菩薩



『尾張名所図会 後編 巻四』「大龍山 雲興寺」小田切春江画 明治13(1880)年刊行

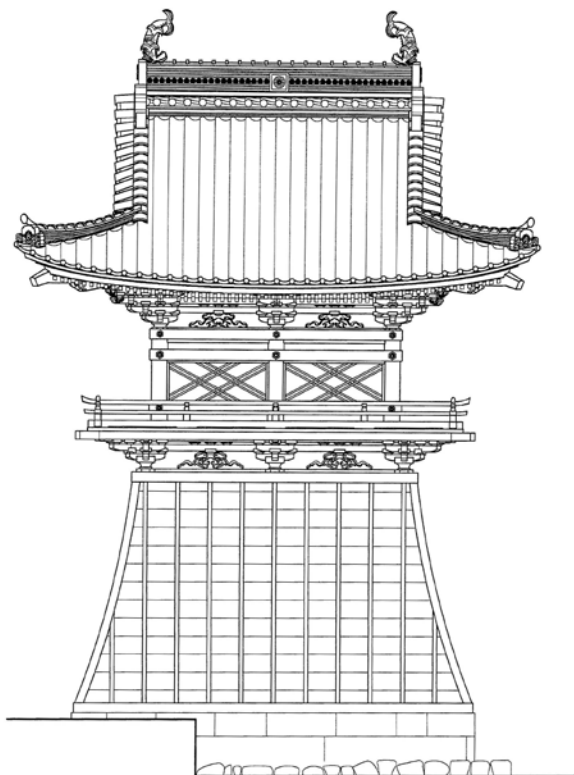


例年 4 月 24・25 日
に開催される性空祭
の様子

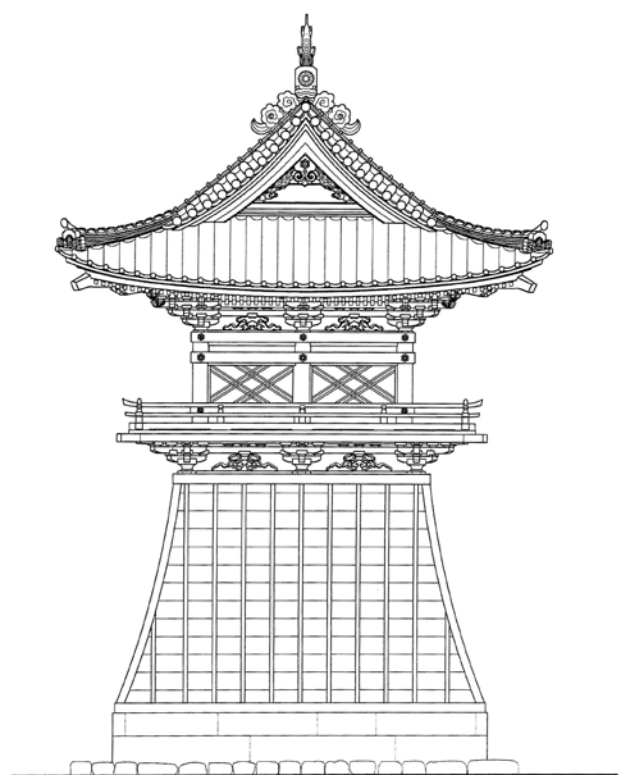
【性空伝説ほか】

実質的な開祖とみられる天先祖命については、数々の伝説が伝えられる。応永 11(1404) 年夏に寺の開堂結制(内外から修業僧を集め特に厳しい修業を行うこと)を行ったが修行僧の中に肉が削ぎ落とされる病で死ぬものが続出した。そんな中、天先祖命が僧堂南の石上にて座禅をしていると真夜中に突然異形のもので刀をもって禅師の前に立ちはだかり、「私は雲興寺山中に住まう鬼神であり、悪報によって人間の肉身を食わねば生きていけない。」と言った。禅師は、鬼神にこれまでの罪業をすべて懺悔するよう強要し、業報の本来は性空であると説諭した。禅師は鬼神を室中に招き入れ、「性空上座」という号を与え、鬼神は業報から解脱した

恩に報いるべく、今後山を守る守護神となることを誓い、門前の盤石の中に姿を消した。というもの。この伝説にちなみ、毎年 4 月 24・25 日には法要が行われ、性空にちなんで盗難などから守られるご利益があるとされる。この縁日には、屋台などが出て境内は賑わう。また、応永 25(1418) 年には、村人や修行僧に心の病にかかる者が多く出て、猿投山の猿投明神に快癒するための祈願をしたところ、明神が禅師の枕元に立ち、山中に棲む龍の毒気を浴びて病が蔓延していると夢告した。このため、禅師は境内の地形が龍のわだかまっている姿に似ており、龍の眼にあたる部分に両眼を開くべく 2 つの池をうがったところ、病にかかるものは無くなったという。



北立面図



西立面図

雲興寺鐘楼 立面実測図(1:80)

【鐘楼について】

鐘楼は、棟札によれば、天和 3(1683) 年建立の鐘楼が腐朽したため、文化 7(1810) 年に雲興寺第 32 世戒琳活乗の代に再建されたもので、このときの大工棟梁は赤津村在住の藤井甚右衛門政清であった。

建築面積は 27.66㎡で、天井棟高は 9.84 m。桁行二間、梁間二間で下階に袴腰を付けた入母屋造の棧瓦葺建物である。下階柱の上に二手先斗栱を置き、上階の組高欄付の縁を支えています。上階の欄間には二重菱や連

子の窓がみられ、上階柱上には、二手先拳鼻付斗 栱が置かれている。瓦には地元の「赤津瓦」を用い、本件を特徴づけています。江戸時代後期の正統派大工による優作といえよう。

梵鐘は第二次世界大戦時に供出された後、この鐘楼から不在となった。現在の梵鐘は、平成 21(2009) 年に鐘楼全体の保存修理工事が行われた際に、新たに鋳造されたものである。



雲興寺鐘楼の赤津瓦



雲興寺鐘楼の棟札

(左：天和 3(1683) 年に新造された際の棟札 右：文化 7(1810) 年に再建された際の棟札)

国指定史跡 瀬戸窯跡（小長曾陶器窯跡）

小長曾陶器窯跡は 瀬戸市の南東部の猿投山北麓の東白坂町に位置しており、その中で標高 300m にある小支丘の南側斜面に構築されている。

本窯は昭和 21 年に瀬戸市ではじめての発掘調査が行われ、昭和 46 年には国の史跡指定を受けた。その後も数度にわたり発掘調査が行われた結果、保存された窯体をはじめ、その手前の前庭部や東側に広がる工房跡、そして、失敗した製品や窯から出た炭などを廃棄した灰原といった、窯業遺跡に一般的にみられる遺構の状況が明らかにされた。平成 27 年には、鳳山町の江戸時代前期の瓶子窯跡とともに「瀬戸窯跡」として国史跡の名称を変更し、今後瀬戸窯の様々な時代の窯跡を追加指定していくこととなった。

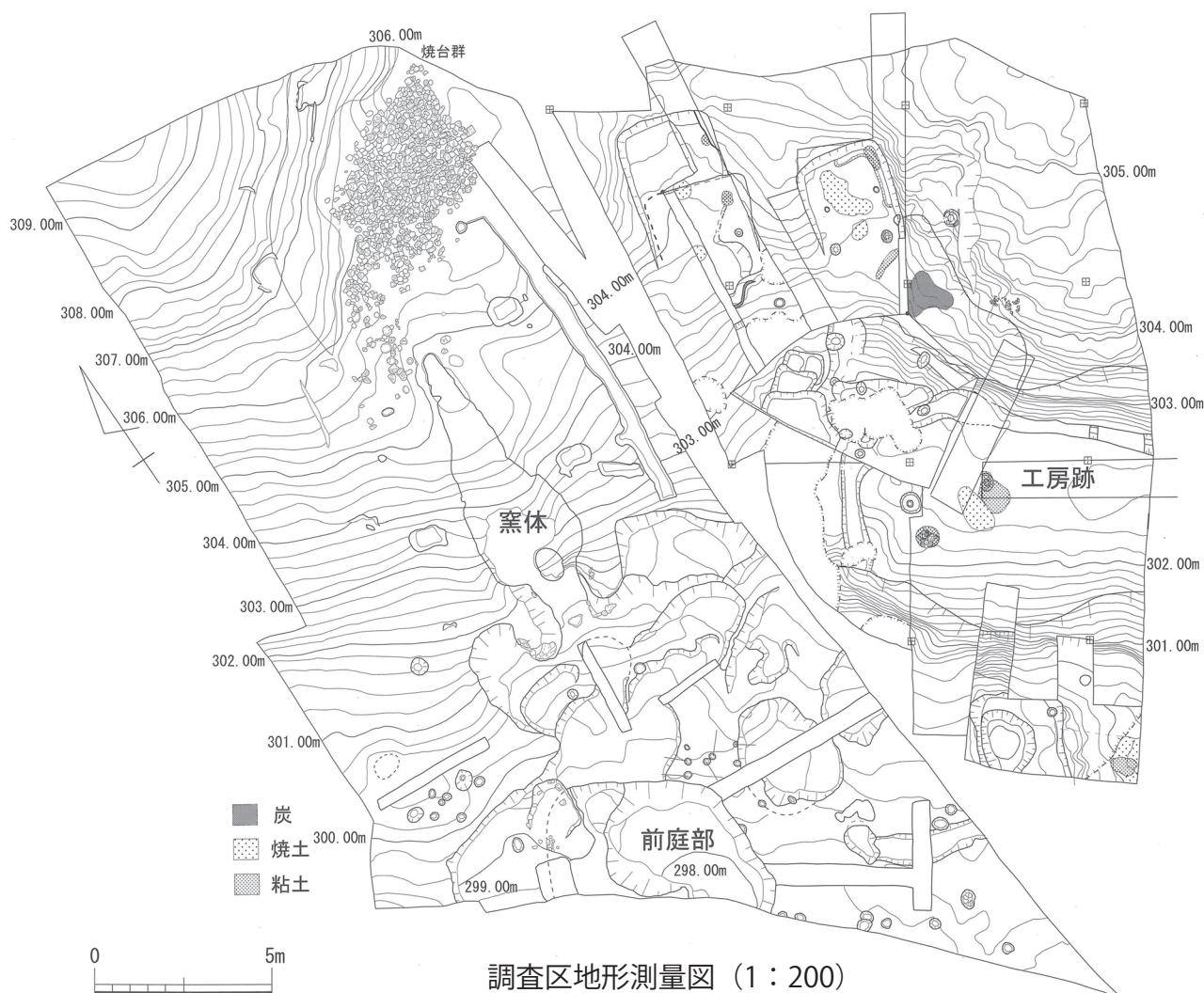
【陶器を焼成した窯】

当時の窯体は、窖窯と呼ばれる丘陵斜面をトンネル状に掘り抜いた簡単な構造のもので、一般的には燃料

である薪をくべる焚口・燃料を燃やす燃焼室・製品を置いて焼く焼成室・そして煙突の役割を果たす煙道からなる。ただし、本窯の場合、焼成室半ばに天井から垂れ下がった障壁と、6 個の通気孔が設けられている点が大きな特徴となっている。また、窯体手前には前庭部が広がっているが、ここで当時の工人が生産に関わる一連の作業を行っていたと考えられる。

【工房跡】 陶器を粘土から成型した作業場

一方、工房跡には、大きく上段・中段・下段の 3 つの平坦面が造成されており、それぞれ異なった機能をもっていた。つまり、下段は窯体手前の前庭部から繋がる平坦面で、やはり前庭部と同様の役割を果たしていた可能性が高い。また、中段ではロクロを使用した遺構が確認されていることから、ここが製品の成型を行う場所であり、さら



に上段は成型した製品の乾燥施設と考えられる遺構が明らかになっている。

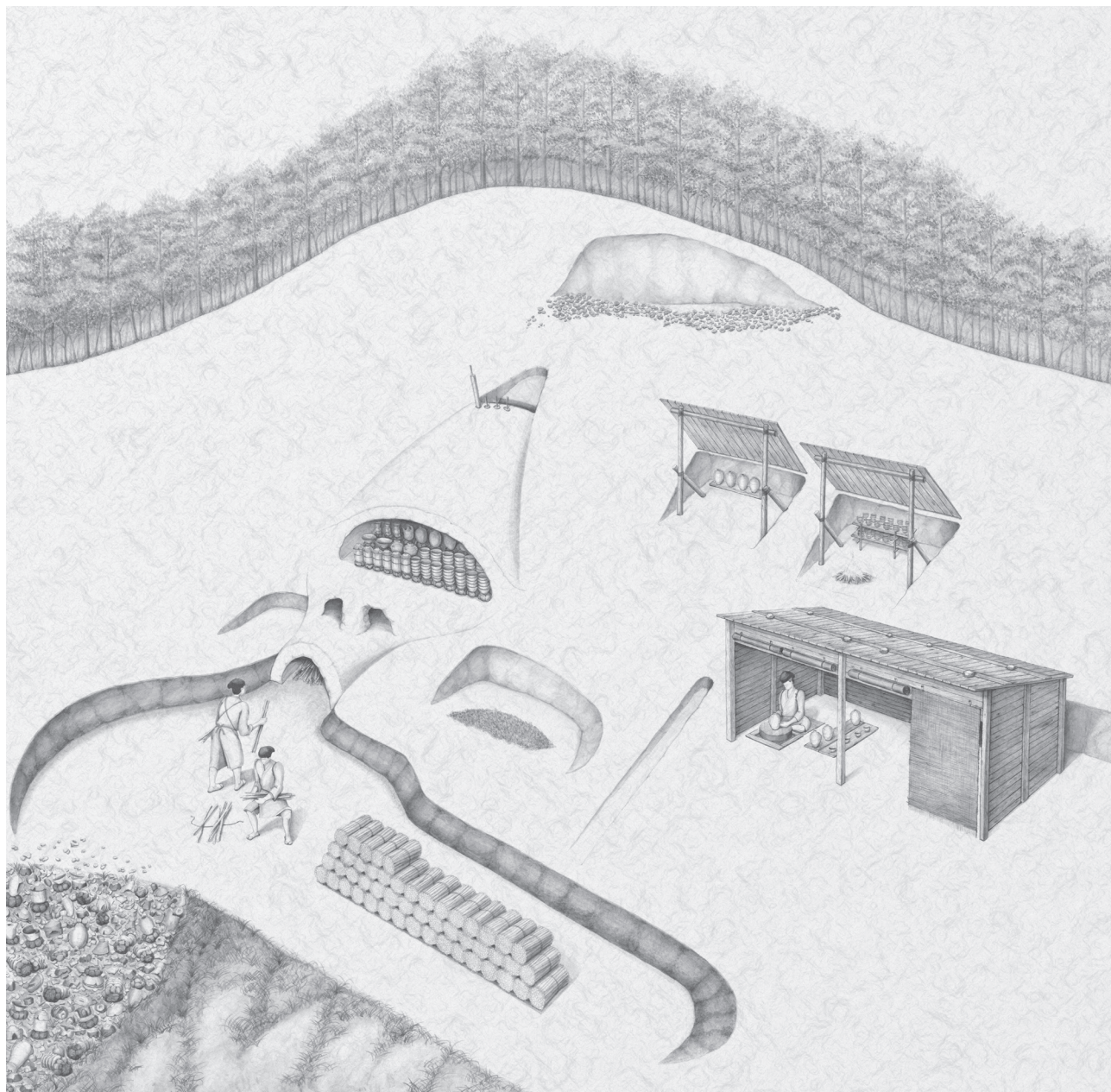
【遺物】生産された陶器

本窯の遺物は、前庭部や灰原を中心に工房跡からも大量に出土しているが、そのほとんどが中世唯一の国産施釉陶器である「古瀬戸」である。これらは概ね 14 世紀末から 15 世紀初頭の室町時代に生産されたことがわかっており、本窯の操業年代がそこに位置づけられることが明らかになっている。

【江戸時代に再利用された「小長ソ」】

本窯については、古くからその存在が知られていたようで、江戸時代の「春日井郡赤津村絵図」

には窯場として「小長ソ」の名がみえ、また、天明八年 (1788) に完成した『張州雑誌』には、「藤四郎藤九郎時代古窯地名」の一つとして紹介されている。さらに同書には、「平・小長曾の窯元禄十二年 (1699)、(藩主の) 命ありて彦九郎これを焼く」と記されており、このことから室町時代に操業された窯を、江戸時代に再利用したと考えられていた。そうした中で、平成 12 年に行われた発掘調査において、前庭部から江戸時代のものと思われる大量の茶入をはじめとした当時の遺物が見つかり、窯の再利用が明らかとなったのである。



小長曾陶器窯跡復元図（室町時代）



窯体全景：写真中央に見える、トンネル状の遺構が窯体全体。焚口～燃烧室部分は大きな石を埋め込んで側壁としている。窯の内部には、焼成室中ほどに小さな柱状の遺構がみられるが、これは江戸時代に再利用する際に付け加えられたもので、室町時代にはなかった。



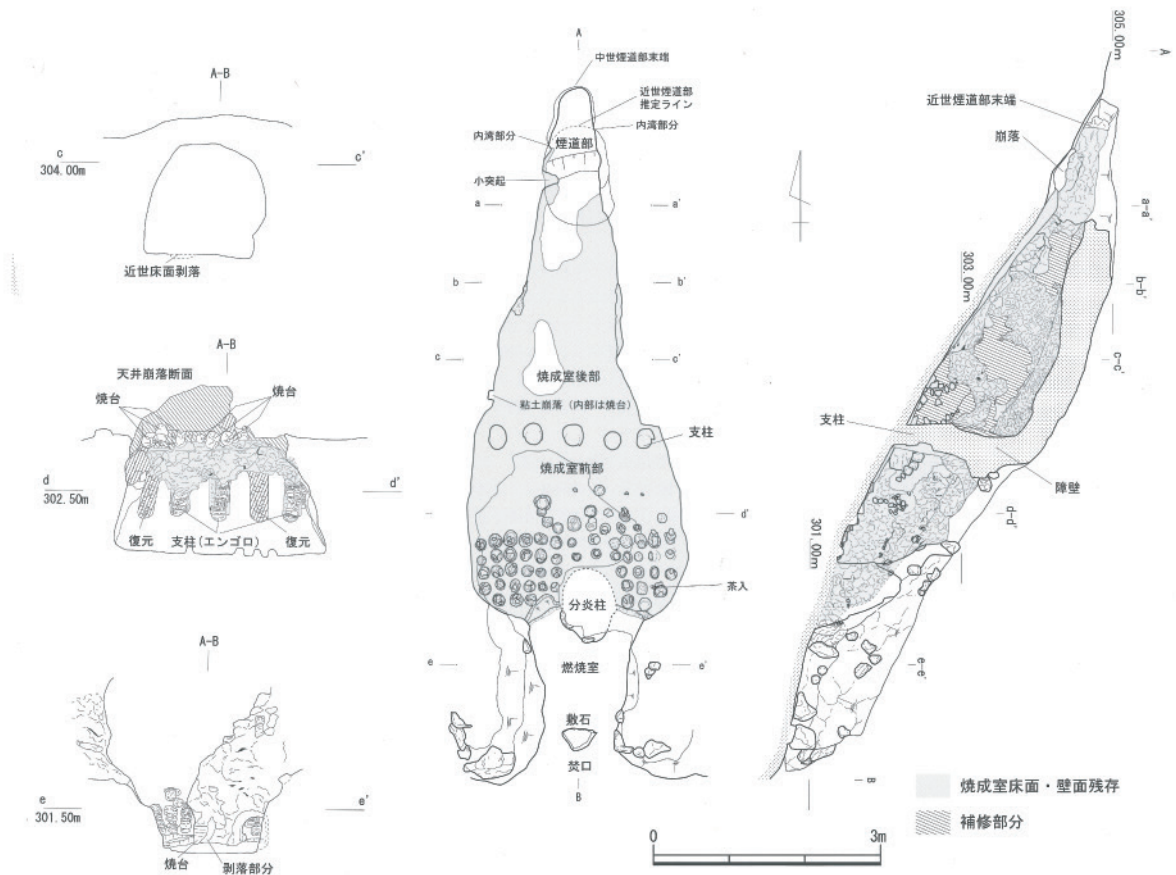
遺物出土状況：窯体手前の前庭部と呼ばれる平坦面に、東西約 5m、南北約 4m、深さ約 1.5m の大きな穴が見つかり、この中から約 40 個の茶道具である茶入が出土した。これらは全て江戸時代のものであり、尾張藩からの特注品を生産していたことが明らかとなった。



乾燥施設：工房跡の上段で検出された施設である。上段はなだらかな斜面になっており、そこに幅約 3.5m、奥行き約 4m の平坦面が造成されていた。検出された平坦面は合計 3 つで、柱穴（写真の丸い白線）が検出されたことから、簡易な屋根が設けられていたと考えられる。



灰原の堆積状況：前庭部からさらに斜面下方には、当時の失敗した製品や、窯から出た炭が大量に投棄されている。深いところでは、1.6m の炭の堆積が確認できた。出土した遺物はほとんどが室町時代のものであり、当時の生産量が極めて多かったことを物語る。



小長曾陶器窯跡窯体実測図 (1:100)



天目茶碗



平碗



縁釉小皿



折縁小皿



香炉



水滴



内耳鍋



瓶子

小長曾陶器窯跡で生産された主な製品 (室町時代)

瀬戸市歴史文化ホームページ

昨年度、新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「瀬戸市の歴史・文化～1000年以上の歴史を誇るせとものまち 陶都瀬戸～」を開設しました。

これまでに開催した「まちめぐり」の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック「千年続く誇りを巡る旅」、瀬戸を知るテーマ別ガイド「のんびりじっくりせとマップ」、瀬戸の百科事典「瀬戸ペディア」などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご活用下さい。

アドレス：<http://seto-guide.jp/>



主催：瀬戸市・(公財)瀬戸市文化振興財団